

(4) 2000年(平成12年) 6月23日(金曜日)

対馬新聞

第3242号

国際ハイウェイプロジェクト

浅茅湾の役割

浅茅湾は東西十五キロ、南北十キロ足らずの海域に長大な海岸線を織り込む日本屈指の溺れ谷である。複雑な地形の入江は優美で、小高い丘からの眺めは息をのむ美しさだ。対馬の誇りといっても言い過ぎではないだろう。

日韓トンネルの可能性を研究している団体として日韓トンネル研究会があるが、彼らも浅茅湾には特別な関心を示している。日韓トンネル開通後に浅茅湾の周辺に展開するであろう国際交流施設は九州地区きつての国際的目玉商品となると見て

いるのだ。ここに彼らが調査した浅茅湾の海水交換についての資料がある。少々専門的になる嫌いはあるが浅茅湾を再認識する意味で紹介しよう。

日韓トンネル研究会では浅茅湾内の海流や水質を実測し、その結果をコンピュータでシミュレーションした結果から、湾内五海域の海水交換率や水中の酸素量を推算している。海水交換率は湾奥の海水が五十日入れ替わる

に必要な期間で、尾崎湾が二日、黒瀬湾が三日、竹敷海域が七日、仁位浅茅湾が十日、濃部浅茅湾が二十日となっている。湾奥にある竹敷海域の海水交換が意外によいのは万瀬瀬戸と大船越で外海につながっているためだとしている。また海産物の欠かせない海水中の酸素は浅茅湾全体にわたって過飽和状態で収支のバランスは非常に安定しているという。また人為的に浅茅湾内に流入する海水を増やすと収支のバランスが崩れ、海水中の酸素が減る海域が出るという注目すべき結果もでてくる。海水交換事業などを行うに当たっては注意が必要ということ

になる。

浅茅湾は変化に富んだ湾であり、その豊富な水産生物資源は、この地域が国際化した場合の重要な観光資源として位置づけられるのは間違いない。これまでも海水交換が少ない海域では真珠貝などの養殖を、海水交換が良いい海域ではさかなの養殖をと、うまくすみわけてきた。海と共に生きる者の知恵であったといえる。もし日韓トンネルができれば確かに浅茅湾周辺は大きく変貌するだろう。そのときも美しい浅茅湾を訪れる人々に安らぎと感動を与えてくれる湾でありつづけるよう努めたいものだ。